

「インタビュー」ノンフィクション作家

# 久田 恵さん

## 放浪と介護の

## 波乱の日々でした



インタビュー・構成／会報編集・郡司武 写真／白谷達也

——今、タクシーを降りたら、牧草の匂いがしました。まさに牧歌的なところですね。

**久田** そうなんです。一昨年暮れに高齢者向け施設の取材で初めてここ（ゆいまゝる那須）に来て、気に入りましたね。すぐに入居の手続きをして、去年の2月にはもう、東京から移住しました。

——急だったんですね。どんなところが気に入ったんですか。

**久田** 取材に2回ぐらい来て、ゲストルームに泊まり、いろいろ話を聞きました。介護を受ける側の居住者が自分たちのセーフティーネットのことも含めて考えている稀なる施設だということは事前に知っていました。実際、ここに身を置いてみて、それを実感しました。私、室蘭で生まれ育ったんですが、夜、ぴゅーぴゅー風が吹いてね、それがなんか懐かしかったのと、風景も牧場が広がっている「ミニ北海道」みたいだったんです。それで「ここで暮らそうかな」と衝動的に決めました。

か？

**久田** うちの「自分の人生は自分で選択してよろしい」みたいなモットーで生きているので。でもね、息子からは「よく考えたの？」「もしそこが倒産でもしたらどうするの？」とかは言われましたね。

——移住を決めた時の気持ちは「ここが終の棲家」という感じでしたか。

**久田** いや、そういう考え方はなかったですね。これまでの自分の人生を考えてみると、人生は予想していたようには運ばなくて、「人生ってそういうもんだ」みたいな考えがどこか染みついているんじゃないかな。

**「お前のことは諦めた。存分に生きよ！」**

——「人生は予想していたようには運ばない」ですか、久田さんの人生を少し辿るようにお聞きしますが、室蘭から上智大に入学されたんですね。

**久田** 学生運動の真っ盛りで、大がロククアウトになってまし

た。タテカン（立て看板）には「労働者と連帯せよ」とか大きく書かれてましたね。それで3年の20歳の時に大学を中退して、渋谷のトランジスター工場で働き始めたんです。

——NHK朝ドラの「ひよっこ」みたいなところですか。

**久田** そうそう、まあ、あんな感じでしたよ。そこで1年くらい働きました。そのあと2、3年、いろいろアルバイトをしていた時に新聞広告を見て人形劇団「ひとみ座」に入りました。「住み込み可」に「ああ、いいな」と思って。ハハ。

——「ひとみ座」って「ひよっこりひょうたん島」の人形劇団ですよね。

**久田** そうです。成功していた人形劇団ですよ。そこではプレハブみたいなところで共同生活するんですが、大学を中退した学生運動挫折みたいな人が多かったんですかね。

——そこで脚本を書いていたんですか。

**久田** それはだいたい後になってからです。

——そんな久田さんに、ご両親はどう思っていたんでしょうか。

**久田** そのころ両親は東京に戻っていて、父から、友だちを巡り巡って手紙がきて、そこに「お前のことはもう諦めたから、存分に生きよ！」みたいなことが書いてありました。ハハハ。母からも「あなたは好きに生きていい。ただ連絡先はわかるようにして、親子の縁を切るとかはしないで！」とありましたかね。

——ほおーっ、そうでしたか。親にそういう対応をされると子ども側も責任を感じて「ちゃんと生きよう」となりますね。

**久田** そうなんです。まあ、でも、そんなこんなしているうちに荻窪で同棲を始めたんです。劇画の「同棲時代」が流行はやっていたころでした。それで息子が生まれて、いろいろありまして、シングルマザーの道を歩み始めたんです。非正規ですけど広告会社で働いたりしながら。

# 自分の人生を考えると、

## 予想していたようには運ばなくて……

——まさに波乱万丈というか、「思うようには運ばない」というか……。それで小さな息子さんを抱えながら、その後、サーカス団に入ったたりもしたんですよね。

**久田** そうなの。子どもが保育園の時に集団になじめなくて、そうになると家で子どもを見なくちゃならないわけでしょ、お手上げ状態ですよ。勤めを辞めて「さあどうしよう」と。そんな時に「サーカスにでも入って生き方変えようか」とふと思ったんです。そこが私のヘンなどこなの。子どもに「ゾウさんとかアシカさんとかと毎日暮らすの、どう？」って聞いたなら「行く行く」って。それでサーカスの写真集なども出している、知り合いの本橋誠一さんに相談し、紹介してもらって入ったんです。——サーカスで何をされてたんですか。

**久田** 炊事係の下働きと雑用などですね。1年と少しやってましたかね。それでその経験をあとで知り合いの編集者に話したら、「それ、書いてみたら」といわれ、それが『サーカス村裏通り』となり、大宅壮一ノンフィクション賞の候補になったんです。その頃、転勤で北九州の小倉に行っていた両親が東京に戻ってくることになり、その際に「一緒に暮らそう」と誘われ、20歳から18年ぶりで一緒に暮らすことになったんです。子どもを両親に見てもらいながら仕事をしていました。

### 「父と喧嘩しながら母を介護しました」

——そうでしたか。長い放浪のような旅もやっと終わったわけですね。

**久田** まあ、そうですね。親に子

どもを見てもらえようになり、それは助かりましたが、同居して1年後に母が脳血栓で倒れたんです。64歳で、右半身まひ、重い失語症になりました。介護を始めたその頃に書いたのが『フィリピーナを愛した男たち』でした。

——それが大宅壮一ノンフィクション賞をとったわけですね。

**久田** そうですね。フィリピンに取材にも行きましたが、入院した母と子どもを父に見てもらわなければならぬわけで、父に土下座して、「フィリピンに取材に行かせてほしい」と頼みましたら「わかった。頑張ってみたらいい。行け」と言ってくれました。嬉しかったです。その恩義もあって、父の最期まで一緒に暮らし、面倒をみることになるわけです。

——倒れた後のお母さんは、どんなでしたか。

**久田** 在宅で10年以上看ました。最初の頃は失語症の訓練なども父と一緒にしていました。意思疎通はけっこう大変でした。それでも少しずつ慣れてきて意思は通じ

るようにはなりましたけど、母の体がだんだん弱ってきて、その後2年半ほど施設に入って亡くなりました。在宅で看る場合、介護とともに、まず家事をしなくちゃならないわけでしょ。父も家事をしましたが、けっこう喧嘩もしましたね。

——どんなことで？

**久田** 急に怒ったりするんです。たぶん父なりにストレスを抱えていたんだと思います。ともかく、父は東大出の理系それも化学専攻で、私は文系。いろいろ食い違ってますよ。例えばご飯を炊く場合なども化学実験のように計量化するんです。それもすごく細かい。計算も早いし。レシピ見ながら、「お前、今、塩、何グラム入れた？」とか聞くんです。「ええっ？そんなのいいじゃない」とか、まあ、そういうくだらないことでの喧嘩でした。今になって、私も悪かったかなと思う時がありますけど。ただ子どものことは溺愛してくれました。父と喧嘩して、「私、出ていく」とか言ったりすると、



## ひさだ・めぐみ

1947年、北海道生まれ。ノンフィクション作家。上智大学を中退し人形劇団に入り、その後さまざまな仕事を経て女性誌ライターに。シングルマザーが子育てしながら働ける場所を求めてサーカスに入団。その時の体験を描いた『サーカス村裏通り』でノンフィクション作家としての地位を確立。1990年、『フィリピーナを愛した男たち』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。2018年、栃木県那須町のサービス付きコミュニティ住宅「ゆいま〜る那須」に移住。『シクスティーズの日々』『100歳時代の新しい介護哲学』など著書多数。

子どもは「ボク、いやだ。おじいちゃん」と居る」とか言うんですよ。その子どもも今、物書きになって（稲泉連さん、40歳。母と同じ大宅壮一ノンフィクション賞を受賞）、エッセイのなかで、〈その時、母は絶望したような表情をしていた〉みたいなきことを書くんですよ。

——ハハハ、笑っちゃいますね。

**久田** ほんとに。

——お母さんの入った施設はどういうところでした？

**久田** 練馬の介護付きの施設で、やっと探したいところでした。私たちも付きっ切りで母を介護しようと、藤沢（神奈川県）の家を

売って、施設のすぐ近く、歩いて3分くらいのところに家を求めて越してきました。

——その施設に2年半ほどいて亡くなったということですね。

**久田** そうですね。最後は体力がどんどん落ちてきて、痰の吸引などの介護にずっと追われてましたね。施設に私のご飯も注文しておいて、母のそばで食べてました。昼は父がずっとそばに寄り添っていましたね。倒れてから12年ほどで亡くなったわけですが、それで、ああいう病気で倒れた人の平均的な年数のようですね。仕方なかったのかな、と今では思っています。

——久田さんのごきょうだいの方は、介護にタッチしなかったんですか。

**久田** 基本的には私と父とでの介護でしたね。私は3人きょうだいでしたが、兄は海外赴任していて、義姉は一人娘なので、近くに住む自分の両親を介護しなくちゃならない、姉は時々来てくれましたけど、夫の両親の世話をしなくちゃ

父はご飯を食べなくなりました。

口をグツと結んで……

ならない。「なんで私だけ」って思ったこともありましたよ。けど、みんな、それぞれいろんな事情を抱えていたんです。

「父は『手を握って俺を看取れ』と言うんです」



サ高住の「ゆいま〜る那須」は、那須高原ののびやかな敷地に木造住宅が5棟70戸、それに食堂棟、介護棟、共用棟が「集まりすぎず散らばりすぎず」配置されている。居住者が持ち寄った本を利用した「図書館」もあった

——付きっ切りで痰を吸引するのも大変ですよ。誤飲の危険性もありますし。

**久田** それで、医師に胃ろうを勧められたんです。「家族で決めてください」って。そしたら父が、「『自分ならどうして欲しいか』って基準で判断すると、『胃ろうはして欲しくない』。だからお母さんにも胃ろうはしないし、自分の時も胃ろうはしないでいい」って言うんです。それから少しして母は亡くなりました。77歳でした。私は一晩、母を抱きかかえていました。父は「お母さんは、娘に抱きかかえられながら亡くなったんだから幸せだ」って言うんですけど、私は、「失いたくないのに、何が幸せか」と思いました。それはとつても重い体験ですよ、それを「幸せだ」って言われてもね。そんな父も、母が亡くなったら調

子を崩してしまつて……。  
——心身ともに、ですか。

**久田** そう。父は母より6歳ほど上でしたが、急に精神的にも不安定になったというか。喪失感が大きかったんでしょうね。タクシーを呼んで、「今から位牌を買いに行く」とかへんなこと言うんです。それはいったん良くなったんですが、でも、目に見えて衰えていき、母の死から8年後に、91歳で亡くなりました。母の入っていた施設でした。

——お父さんの最期はどういう状態でした？

**久田** 父は用意周到な人で、自分の最後については、「胃ろうはしない」「過剰な延命治療はしない」と私に告げていました。兄と姉と私の三人の子どもにメッセージが書かれた遺言書も残し、財産関係もすべて整理を済ませていました。そして、私に「お母さんが亡くなった時のように手を握って看取れ」って言うんですよ。「えーっ」と思いましたが、一応「はい、やります」と約束をしました。そ

れから、ある時、父はご飯を食べなくなりました。口をグツと結んで。父の強い意思だったんでしょか。それで、私は父の部屋にベッドを入れて、そばで寝るようにしました。そんな、みんなが寝静まった真夜中、私が手を握っているなかで、父は亡くなりました。

——久田さんの人生を振り返りながら、今のお話をお聞きしていると、なんか人生の大団円のような感じもしますね。今日は、いろいろ踏み込んだお話をお聞きしました。ありがとうございました。

### インタビューを終えて

大学を中退し人形劇団へ。同棲、シングルマザー、幼子を連れてのサーカス団入団、大宅壮一賞受賞、親との没交渉から修復、介護……。まさに波乱の「女の一生」を間近に見る思いでした。その時々久田さんを強く支えたのは「人生は予想していたようには運ばない」との諦観であったか。恐るべし、経験則。